久米賞　佳作　受賞作品

二〇二二年の僕

郡山市立郡山第六中学校
大下　聖織

帰り道

学校の帰り道
冬は真っ暗になる

よその家から明かりがもれる
少しホッとする
僕の家まではまだまだある
暗い道のりを少しはや足で帰る

あっ、やっと家が見えた
辺りが暗くても家だけ明るい
他の家の明かりより安心するのは
そこで母が待っていてくれるからだ

意地悪な時計

チラッと時計を見る
しばらく勉強して
またチラッと見る
でもちっとも動かない

なんだよ
ゲームしている時は
あっという間に時間が過ぎて
「もう終わり」って言われるのに
勉強している時は全然動かない
とっても意地悪な時計だ

大人と子供

もう中学生なんだから○○しなさい
と母は言う
まだ中学生なんだから○○しないで
と母は言う

大人は良くて子供はダメって
中学生ってどっちなんだ
もう中学生で大人なのか？
それとも
まだ中学生だから子供なのか？

都合の良い時は大人になって
都合が悪くなると子供になっている気がする
本当、大人ってズルいよなー

僕の気持ち

「ねえねえ、聖織はどこの高校に行きたいの」
母が聞いてくる
——まだそんなのわからないよ
「〇〇高校っていいよね、大学受験のこと考えるとさ」
——高校もまだなのに大学って…考えられないよ
「こんな成績じゃ〇〇高校入れないよ」
——だから、〇〇高校はお母さんがいいって言っただけだよね
まだ決めてないから
「夏休みが受験を制するんだよ！」
——どういうこと？意味わかんない
母から言われるたびに考えるけど
僕の気持ちはまだ決まってないんだよ

色

テレビで感情の色が見えるドラマをやっていた
色の意味はわからないけど見えたらすごいな
相手の気持ちが言葉で表さなくてもわかるんだから
うそついたってわかるんだ
僕の感情は何色かな
学校にいる時は楽しい感情かな
勉強している時は悩んでいる感情かな
家にいる時の感情はわかる
家族みんなの愛情で包まれているから
きっと優しい感情で満たされているんだ

（指導教諭／佐々木　英　人）

《作品の意図》
二〇二二年の僕の感情の変化です

《作品の寸評》
普段の生活では、今あるものの幸せに気づく機会が少ないかもしれない。しかし、大下さんの詩は、読者まで素直に作者と幸せを共有することのできる表現に満ちている。『帰り道』に書かれた「真っ暗」は作者にとって実に大切な時間だと思う。『大人と子供』の詩にあるように中学生時代は理不尽だと感じる出来事が山ほどあって「真っ暗」な気分になるし、『僕の気持ち』では母親とのやりとりを軽妙に織り込みながらも、進路決定はどうしたらよいか一人で抱えるしかない。多感な中学三年生の詩に描かれた様々な暗さが、親しみやすい口語表現を装置に、背後で見守る家族のあたたかさをじんわりと感じさせる舞台となっている技量に感心した。

（審査員／柳　沼　智　恵）